さざなみ国語教室
第492号　2023年3月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

子どもの「学ぶ楽しさ」に学ぶ

上塚　浩一郎

四月に現任校に赴任しました。素直で優しい全校児童三十二名。完全複式の小さな学校です。そんな学校で、「学ぶ楽しさ」を知る子どもを育てようと、職員みんなで教育活動に取り組んでいます。

その取組の源泉は、教諭時代に出会った吉永先生の素晴らしい実践にあります。拙いながらも、御実践をもとに、自分なりに子どもたちと「学ぶ楽しさ」を考えたことが、授業づくりに生きたと実感しているからです。

先日、子どもたちの「学ぶ楽しさ」を改めて感じた出来事がありました。

集団で下校するために集まったある日。他の学年よりちょっと早く来た一・二年生の八人が、「校長先生！この前の『お経』覚えてます！」と、突然声をそろえて唱し始めました。

「お経」は阪田寛夫さんの詩です。実は半月ほど前に、急遽一時間だけ授業の補助に入ったときに、授業後半で教えた詩でした。予定の学習内容を終えた後、時間があったので、何か楽しく言葉を学ぶ題材はないかと思いました。

私たちは、ふと学んだことで楽しくなり、もっと知りたくなって、さらに調べるということがあります。一・二年生には、そのきっかけとして、「楽しんで読む経験」や「図書室に行って本を探す経験」をしてほしかったのです。

そこで、阪田寛夫さんの「お経」を覚えてもらうことにしました。楽しいリズムで、短時間で覚えられて、でも覚えるにはちょっと難しい詩だからです。

お経　阪田寛夫
電車馬車自動車
人力車力自転車
交通地獄通勤者
受験地獄中高生
合唱練習土曜日
空腹帰宅晩御飯

ふりがなを付け、題名のとおりお経っぽく読みました。子どもたちは喜んで口ずさみます。

数回の音読の後、「先生は覚えたから、少しずつ黒板の字を消しますね。」と言葉を少しずつ消しました。「うわあ。消さないで！」と子どもたちの叫び声。そう言っていた子どもたちも、だんだんと「覚えたから消しても大丈夫です！」と言い始めます。消されるたびに、目をキラキラさせながら、何度も何度も暗唱練習をしていました。

その時間の最後は、何も書かれていない黒板に向かい、自信たっぷりに「お経」を暗唱できました。

それから半月ほど経ったにもかかわらず、全員が暗唱できたことをうれしく思いました。授業の時と同じキラキラした目も印象的でした。

とてもうれしかったので、司書補の先生にもこのことを話しました。すると、さらにうれしい話を聞くことができました。

「ああ、それで図書室に来て、詩をたくさん読んでいるんですね。『お経』も見つけて読んでいますよ。」と。

図書室で楽しく学んでいるであろう様子が思い浮かびました。

夢中になって言葉に向かう、子どもの「学ぶ楽しさ」に触れて、改めて自ら学ぶことの大切さを感じました。

私もまずは何か一冊。自分の「学ぶ楽しさ」を味わおうと思います。

（熊本県八代市立二見小学校長）

さざなみ

▼卒業アルバムに色紙のページがあります。教職員が、一枚の色紙にそれぞれ一言ずつ、卒業生へ贈る言葉を書くということが恒例になっているのです。その色紙に私は、「国語力は人間力―挨拶・返事。丁寧語―」と記しました。将来の夢を持ち、希望にむかってはばたく卒業生へ贈る言葉としては地味なものだと分かっていました。が、色々と考えた結果、この言葉に落ち着いたのです。つまり、人間関係力の基礎となる言葉と考えからです。▼最近の関心として「返事」があります。これは、小学校一年生の国語科の指導内容であります。最初は、「はい」ということから始まります。その一言は、それほど難しいことではありません。しかし、学年が進むにしたがって「いいえ」という否定の返事が大事なことに気付きます。否定の返事には、勇気が伴います。熟考して、「いいえ」と言える力が必要になることが多くなるからです。▼谷川俊太郎さんの詩「生きる」に次の言葉があります。それは、「生きるということ／いま生きているということ？（中略）すべての美しいものに出会うということ／そして／かくされた悪を注意深くこばむこと」ということです。思い込みでなく、訊ね、確かめ、そして、決めた結果が、「はい」であり「いいえ」という返事だからです。

（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

「だれに　言っている　のだと　思いますか。」

川端　大介

学年末となり、本学年でのまとめや次学年に向けての準備に向かう時期となった。

今年度は一年生を担任している。子どもたちは一年間で大きな成長を私に見せてくれた。特に国語科では、聞く・話す、書く、読む等の力を多様に身に付け、国語授業を楽しみにしている子どもたちが多かったように感じる。

一年間の最後を締めくくる物語文である『ずうっと　ずっと　大すきだよ』の学しゅうでは、一年間の国語の学しゅうのまとめとして指導者も気合いが入った。

本教材は、「ぼく」とエルフとの楽しかった思い出だけでなく、エルフの老いや死、後日談までが描かれている。そのため、子どもたちが本教材を読むと「温かい気持ち」や「悲しい気持ち」など、様々な感じ方が表れる。

また、「ぼくは」という一人称で描かれている物語なので、「ぼく」と自分を重ねながら読みやすい作品である。このような教材の特徴から、同じ叙述からでも自分と重ねて読むことで、その子なりの感じ方が分かり、クラスで共有する面白さのある教材と言える。

この言語活動につなげていくために、単元のはじめには「〇〇な気持ちになるお話」という一言感想を書きことにした。この一言感想を全体で共有し、「温かい気持ち」などのプラスなイメージと「悲しい気持ち」などのマイナスなイメージなど、様々な感じ方が出てくると予想した。

単元の初めは、一年間継続して取り組んできた音読活動でクラスの雰囲気を盛り上げ、内容の理解を図れるよう変化のある繰り返しで読み進めていった。題名の横に〇を十個書いて学習を始めるのだが、学習が終わるころには五十個から九十個ほど〇を塗りつぶす子が出てくる。学級での音読は本当に楽しいようで、全員が好きだと言っていた。このような子どもたちの言葉や姿は私の国語授業への感心をさらに高める。指導法や単元計画、教材分析をさらに行い子どもたちが「分かった」「できた」と感じられる授業を目指したい。

物語を学習した子どもたちに『「ずうっと　ずっと　大すきだよ」はだれに言っているのですか。』と発問した。感想は次のようであった。

“「ぼく」は、どんな生き物を飼っても大切にしていこうと思って、「ずうっと、ずっと、大すきだよ」って言っているんだと思います。”

“「ずうっと、ずっと」というのは、エルフに対してだと思います。きっと、「ぼく」の心の中でエルフは生きているんじゃないかな。”

物語文を学習することは、人生を豊かに生きていくための視点や考え方を学ぶことだと考えている。

次年度に出会う子どもたちにも、国語学習の楽しさを教えていけるよう精進していく。

（守山市立　立入が丘小学校）

「総合学習から考えたこと」

川端　由起

２年生の担任もそろそろ終わろうとしている。４月から、今の児童たちは、３年生の新しい学習が始まる。その中で、初めて出会うのに総合的な学習がある。

論理的に物事を考え、素晴らしい技術革新を起こし、人々と協同して物事を進められる人材を育成するのが、これからの日本で大切なことであると、様々な人が言ってきた。そこから総合的な学習が始まった。子どもたちは汎用的能力を育成するための探究的で協同的に学ぶ学習をする、が目標であった。しかし、実際は、総合的な学習を進める上で、今のままでは学習を本当に理解できないのではないかと懸念している。

２年生では、国語科において、難しい説明文はあまり出てこない。１月に「おにごっこ」で、世界のあそびを紹介しよう！という設定で、図書室にある「世界のあそび」の本からお気に入りの遊びを探し、遊び方と絵、その遊び方の良さを書かせた。しかし、遊び方の良さをほとんどの児童が書けなかったのである。遊び方の良さとは、日本で慣れ親しんだ遊びと世界の各国の遊びと何が違うか、どこが日本の遊びより面白いのかを書かないといけない。いわゆる対比である。２年生では三部構成（はじめ・中・終わり）をとらえる、小見出しの効果やまとめをとらえることが技能として必要とされており、対比という技能は必要とされていない。つまり出来なくてもいいのである。しかし、そこに落とし穴があるのである。

私はこれまで総合の学習で、児童が悪戦苦闘しているのを見て、何故苦しんでいるのかわからなかった。総合学習では、①課題の設定②情報の収集③整理・分析・収集④まとめ・表現という流れで学習を進めて行く。ただ、課題の設定において、今まで、児童は何が課題かほとんどの者が気づけないのである。恐らく、頭の中ではイメージしているかもしれないが、それを言語化できないのである。言語化できないので、探究・協同的な学びには到底到達しない。だから表面的な学びだけで終わり、探究的・協同的な学び合いは出来ていなかったのではないかと感じるのである。

総合の学習を遂行するためには、実は当学年で求められる国語の読みの技能が身に付いているだけでは不十分で、２学年上の国語の読みができていないと、実は総合の学習を遂行できないのではないかと今年度感じた。

では、どうしたら総合の学習で求められる知識や思考を身に付け、それを言語化できるのか？国語科でやるべきことは決まっている。私は全ての教科において言葉を大切にし、考えることが必要だと思った。今までは、国語、生活、算数、音楽体育、図工と各教科で求められる技能や思考を子どもたちは身に付けていればよかった。しかし、全ての教科において、もっと言葉で考え、言葉で表現する。それが子どもたちの言葉力を学校で鍛える最大の方法だと考える。どうすればそれが可能かすぐには答えが出せない。しかし、必ず道はあるはずだ。それを見つけ出して子どもたちに力をつけていきたい。

（草津市立志津小学校）

説明文の学習について

川部　長人

三学期に『弱いロボットだからできること（東京書籍五年生）』の学習を行った。五年生では最後の説明文の学習となるため、子どもたちがこの一年間を通して、どのような読みの力が身につけたかを期待をしながら実践を行った。

○教材分析

本単元は『弱いロボットだからできること』と『テクノロジーが見せる未来』の二つの教材文の比べ読みをして、テクノロジーと人間との関わり方について、考えをまとめるという流れとなっている。二つの教材文の主張は大きく異なっているが、どちらの教材文の主張に賛成するかといった意識ではなく、それぞれの教材文の主張はどのような観点から書かれているかを分析させることで、対象に対する多面的な見方を育てていきたい。

○単元目標

あるテーマについて、異なる面から見た複数の文章を読んだり自分の経験や知識と照らしたりしながら多角的に捉え、自分の考えを深めることができる。

○単元計画

第一次　単元の学習の見通しを考える

第二次　『弱いロボットだからできること』と『テクノロジーが見せる未来』の二つの教材文を読み、書いてあることを確かめたり、内容について考えたりする。

第三次　テクノロジーと私たちの関わりについて、自分の考えをまとめた文章を書き、本単元の学習を振り返る。

教材文の読み取りの一場面で子どもたちの成長を感じた部分を紹介する。

Ｔ：「弱いロボットだからできることってどんなこと？」

Ｃ１：「ゴミを拾えるように誘導する」

Ｃ２：「周りの人の協力を引き出す」

Ｃ３：「弱さを受け止め、たがいに関わり合いながら生きていくこと」

Ｃ４：「いっぱいあるけど、結局筆者が一番言いたいことはどれなん？」

Ｃ５：「それはまとめの部分に書いてると思う」

Ｃ４：「何でまとめに書いてるの？」。

Ｃ５：「説明文では筆者の主張がまとめに書かれているから。主張っていうのは筆者が一番伝えたいこと」

Ｃ４：「前にそんなことを勉強した気がするわ。まとめは一番最後の段落？」

Ｃ６：「それは序論・本論・結論とかに分けてみないとわからんと思う」

Ｔ：「では一度文章を序論・本論・結論に分けてみて、筆者が一番伝えたかったことを考えてみようか」・・・

学習で困っている児童に対して、他の児童が解決の方法や見通しを話し合っている場面で、教師として子どもたちの成長をとても感じ、うれしかった。今まで学んできたことを生かしたり、自分たちで学習を創っていこうとする姿は六年生の学習でも続けていってほしいと願っている。

（東近江市立能登川南小学校）

担任一年目を振り返って

桑原　孟夢

三月十八日（土）に修了式がありました。子どもたちは最後の一週間に一年の振り返りをしました。なので、自分も自身の指導を振り返りたいと思います。

まずは生活指導についてです。子どもたちに①学校のルールを守ること、②身の回りの整理整頓をすること、③自分がすべきことをきちんとすることを指導しました。学校のルールとは時間を守るといった集団生活において欠かすことのできないことや丁寧な言葉で話すといった附属小学校で大切にしている約束事などです。僕が指導をする上で特に気をつけたことは整理整頓です。雑然とした中では落ち着いて生活をしたり学習に取り組んだりすることができないと考えたからです。そこで、先生である自分が身の回りの整理整頓を徹底しました。「ゴミのないところにはゴミは落ちない。」という有名な言葉があります。その言葉を常に意識し、終わりの会で机を揃える、机の横に決められたもの以外はかけない、玄関の傘立てに傘を置いたままにしないということは特に指導を徹底しました。すると、周りの友達が整理整頓に取り組むのを見て、できていないことに自ら気づき、整えようと行動する姿がありました。

次に学習指導についてです。授業の準備を早くできるように心がけました。これは三学期から意識したことです。一・二学期は一日一日が精一杯で教材研究を充分にすることができませんでした。そのため、三学期は授業の見通しをもち、一週間分の授業の準備を前の週に行いました。それまでは、その日の授業の準備を当日の朝にしていたので、改善してからは朝の時間に教室で子どもたちと接する時間が増えました。

担任一年目でわからないことも多く、先輩方に様々なことを教えていただきました。その中で、整理整頓のように一年間を通してできたこと、授業の準備などの途中で意識できたことは今年度の成果だと思います。来年度は反省をいかしてさらに成長できたらと思います。

（京都女子大学附属小学校）

頼まれごとは試されごと

伊庭　郁夫

学校現場にいた頃、吉永幸司先生から「来た仕事は断らない」という意味の仕事の流儀をお聞きした。

思い返せば、滋賀大学付属小学校での全国大会の授業をはじめ何度か公開授業をさせていただいた。

「挑戦・小学生の説明文ディベート」を明治図書から出させていただくチャンスを得たこともある。

実践国語の会をはじめ幾つかの研究会に参加し、提案もさせていただいた。北海道から九州まで滋賀県外の先生方と交流できた。

さて、六年前に学校現場を離れ福祉の仕事につくことにした。

知的にハンディのある方の支援が主な職務である。そのかたわら休日や夜間に「頼まれごとは試されごと」と思い時間の許す範囲で多くの経験をさせていただいている。

新旭北小学校の「学校運営協議会」や地元深溝区の「社会福祉推進委員長」の立場での取り組みがある。五六年生の総合的な学習の時間では、地区ごとに分かれて小学生企画の活動を共に考えた。

そして、三つの活動に集約された。一つ目は、お宮さんや観音さんの遊具のペンキ塗りである。新品のように丁寧に塗る姿があった

二つ目は、地元の先人「藤本太郎兵衛さん」の学びである。瀬田川の川ざらえを親子三代にわたって命がけでされた。著書を出版されている方をお招きして先人の懸命な思いをお聞きした。

三つ目は「逃走中」である。テレビの番組をヒントに場所やルールを考える。生憎、夏休みに計画していた実施は。新型コロナのため九月に延期した。当日は、地元深溝区の小学生が三〇名以上集まり、「逃走中」を楽しんだ。大人は、安全面の見守り・保険・サングラスの準備などをサポートした。当日は校長先生や地区担当の先生にサプライズでハンター役をお願いした。

二月には、小学校で各地区の取り組みについてタブレットを使いながら発表会が開催された。ペンキ塗りでは、遊具のビフォーアフターを比べての発表があり一目瞭然であった。

法務局の「人権擁護委員」や「新旭町人権推進協議会長」を頼まれた。

学校現場にいた頃は「いじめなどの相談カード」を配っていた。今は、電話相談を受ける側である。大津法務局で終日「子どもの相談」「女性のホットライン」「一般の人権相談」を受け持つ日がある。解決の最後は自分で決めていただく。傾聴し、幾つかの選択肢をお示ししたり、法テラスなどの専門機関を紹介したりするなどケースバイケースである。先輩の人権擁護委員さんから「上から目線には絶対ならないように」と教えていただいた。

高島市では、小中学生から「人権標語」を募集している。低学年・中学年・高学年。中学生の部からポスターに掲載する標語を選ぶ。この標語を掲示するだけでは勿体ないと思い、職場では標語のキーワードを穴あき問題にして活用している。

また、「高島藤樹会」では、三月七日の立志祭で市内三年生対象に講話をさせていただく機会がある。今年は、マキノ南小とマキノ西小で話をさせていただいた。

藤樹紙芝居をＣＤにした「志を立てる」がわかりやすい。更にパワーポイントで「知良知」「五事（貌言視聴思）を正す」を紹介する。

三年生は一人ひとり「志」を発表する。

「警察官になって平和な世の中にしたい。パソコンも学ぶ」

「ケーキ屋さんが夢である。計算をがんばりたい」

「キャンプ用品店をしたい。そのため国語や算数をしっかり勉強する」

今すべきことを発表できている。

私は、四月から区長。新しい景色を楽しみたい。

（社福　虹の会　アイリス）

編集後記

▲二月例会（第四九一回）では、前半に第４回「近江の子ども俳句教室」の実行委員会で、作品集の編集を行いました。

▼実行委員が受賞作品の講評を執筆しました。また、「前書き」では、同じ俳句でも助詞の違いで描かれる情景が違ってくることを、「後書き」では、同じ場面でも作者の思いで違う俳句が生まれてくることに触れています。俳句を通じて表現活動を楽しむことのヒントにしていただければ幸いです。

▼実践提案は少徳信さん（彦根市立河瀬小）の「大造じいさんとガン（５年）」。「『大造じいさんとガン』の珠玉の一文を解説しよう」のめあてです。『確認―解釈―評価』の３層の学習内容を、「物語の設定―物語の内容を深める―物語の心にふれる」という学習活動と対応させた提案。５年生一年間を通じて物語の全体を見通す力をつけることを指導の目標にして関連を図ってきたとの報告でした。

▼第５時（全８時）でのＴとＣの綿密な記録を、音読分担して再現しながら協議を深めることができました。授業研究は教室の事実に基づくことの大切さを確認しました。またノート記録や本時の振り返り記録（自己評価等）等の、学び手の育ちや課題を実証的に明らかにする提案の仕方の課題も確認しました。

▼巻頭には、上塚浩一郎様から玉稿をいただきました。深謝申し上げます。（森　邦博）